

1.2.3 河川環境の現状と課題

豊川は全国有数の清浄な水質を保ち、山間渓谷部を急勾配で下り、その後豊橋平野で蛇行を繰り返しながら瀬や淵を形成し、緩やかに流れ、良好な水質や豊かな河道内の樹木群により良好な生物の生息・生育環境を育んでいる。

上流部は、スギ・ヒノキの人工林が主体で、中央構造線を挟んで領家変成帯、三波川変成帯帯及び設楽火山層が入り組む複雑な地質や地形となっている。河岸は自然崖とそこに分布するアラカシ-ウラジロガシ群落、ケヤキ-ミヤマクマワラビ群落等の河畔植生がせまり良好な環境を形成している。河道は溪流を呈し、オイカワ、カワムツ、シマドジョウ等のほか、アマゴ、アカザ等も生息しており、国指定の天然記念物であるネコギギも生息している。

中流部は、発達した河岸段丘の間を蛇行し、随所に砂州が発達して瀬や淵を形成し、入江や溜まりもみられる。河道は砂礫でアユ・ウグイ・オイカワ等の産卵場も点在している。また、両岸には高水敷が広がり、水辺にはツルヨシ、アカメヤナギ、カワヤナギ等の低木群落、高水敷にはエノキ・ムクノキ等の落葉広葉樹やマダケ・メダケ等の木本植生の大規模な樹木群が水辺を中心に存在している。この樹木群ではヒヨドリ、キジバト、カワウ、サギ類等が生息し、砂州はイルカチドリ、シロチドリ等の営巣地となっている。これらは、豊川の清浄な水面と調和して川特有の水と緑が織りなす良好な環境を形成している。

下流部の吉田大橋付近までは、河道は砂質で、中流部と同様な樹木群と大規模な耕地等が混在する広い高水敷が広がり、水辺にはヨシ・ヤナギ等の植生が繁茂している。この区間は感潮区間で干潮時には砂州が、また満潮時には豊かな水面がみられ、マハゼ、ボラ、スズキ等の汽水性魚類、ウキゴリ、ウナギ等の回遊魚及びウグイ、カマツカ、ニゴイ等の淡水魚が生息している。このような豊川独特の環境・景観が、豊橋市等の都市化が著しい地域にあって下流域に残された数少ない自然的空間を提供している。なお、吉田大橋より下流は、コンクリート張護岸のほぼ単断面河道で植生は単調であるが一部にヨシ群落もみられ、河道は砂質でヤマトシジミやテナガエビ等が生息している。また、河口部はシギ、チドリの渡りの中継地、カモ類の越冬地となっている。

このような現状を踏まえ、豊川では樹木群に代表される良好な自然環境や景観を保全するとともに、安定した河床を維持していくことが望まれる。また、豊川本川では全国的にみても極めて良好な水質が維持されているが、本川河口部付近や豊川放水路では赤潮がしばしば発生しているため、水質改善の方策について検討する必要がある。

なお、豊川放水路は洪水を分派する目的で建設された直線的な人工河川であり、全川にわたって植生が殆どないことから、景観面が課題となっている。

豊川には現在も渡し船が市道として残されており、下流部では干潮時にはシジミ採りが盛んである。また、河川空間は、沿川住民の身近な空間として、スポーツ、野外レクリエーション、散策、伝統行事、イベント等の場として高水敷や水面が盛んに利用されており、河川と住民とのふれあいの場や、身近な環境教育の場として期待されている。

良好な水質や豊かな河道内の樹木群により育まれている多様な生態系及び瀬・淵、水際部等の河川環境については、水辺の国勢調査等の諸調査を実施して状況把握に努めている。

一方、豊川等が流れ込む閉鎖性水域である三河湾では、近年水質が悪化し赤潮の発生等が頻発しており、三河湾の浄化対策が課題となっている。